

中部支部

浅野文祐, 松野祥彦, 松下知路
大屋英樹, 近藤博人, 斉藤吉男
瀬古 章, 石原陽一郎

関ヶ原町でヘリカルCTを使用した肺癌一次検診を行った。平成11年度は328人が受診し、肺癌を疑うE判定は31人で、原発性肺癌を3例(腺癌2例, 扁平上皮癌1例), 転移性肺癌を1例発見した(原発性肺癌発見率0.9%)。平成12年度は505人が受診し、E判定は17人で、原発性肺癌を2例(腺癌1例, 小細胞癌1例), 異型腺腫様過形成を1例発見した(肺癌発見率0.4%)。平成13年度は587人が受診し、E判定は15人で、現在精査中であるが、原発性肺癌を2例(腺癌2例)発見した。

16. 当院ドック検診での中の肺癌CT検診

厚生連安曇総合病院 津島健司
曾根脩輔, 高山文吉, 李 思元
信州大学第2外科

金子和彦, 羽生田正行
同 第1内科 山口伸二, 久保恵嗣
検診に胸部CTを導入し、肺癌の頻度を検討した。2001年4月から2538名に multislice CT を施行。判定は、E 27名, Ed 85名, F 90名。E判定のうち10名が手術、8名が抗生剤投与後に良性疾患と診断、9名がフォローアップとなった。手術結果は、肺癌:7名, 良性腫瘍:2名, 感染症:1名であった。E判定の病変は10mm以下18例, 11mm~15mm:4例, 16mm~20mm:3例, 21mm以上2例であった。手術例に良性腫瘍が認められ、気管支鏡や経皮的生検など術前診断の進歩の必要性がある。

17. 当院にて最近経験した腫瘍最大15mm以下の末梢型肺癌手術例

国立療養所富士病院呼吸器外科
神原賢士, 緒方孝治, 平野竜史
西海 昇, 堤 正夫, 石原重樹
並河尚二

'98年HRCT導入以後、末梢型小型肺癌の手術例が増加傾向を示しており、その検討を行った'98年1月から'01年9月までの間、原発性肺癌手術例は133例。pt1症例は48例、そのうち腫瘍最大径15mm以下の症例は9例(18.7%)であった。性別:男性:

6例 女性:3例(平均65.3歳)組織型:腺癌7例 扁平上皮癌1例 小細胞癌1例であった。腫瘍径10mm以下の症例2例と小細胞癌1例を提示する。

18. 印環細胞型肺腺癌の1例 藤枝市立総合病院呼吸器内科

橋本 大, 塚本克紀, 森田純仁
田村亨治
浜松医科大学第2内科

千田金吾, 中村浩淑
症例は64歳女性。平成13年6月初旬より咳嗽、発熱が出現したため当院を受診し、頸部リンパ節腫大を指摘された。リンパ節生検で印環細胞癌と診断され、また血中CEA 1687 ng/ml とCA19-9 478 U/ml の高値を認めた。胸部CTで左上葉に径15mmの結節を認め、気管支鏡検査で気管分岐部から左主気管支に多数の白色結節が確認された。消化管を含む全身検索で肺以外に異常を認めず肺原発と診断した。CDDP+NVBの化学療法を2コース施行したがPDであった。

19. 同一肺葉内に多発に存在し空洞を伴った腺癌の1例

国立療養所東名古屋病院呼吸器外科
新美誠次郎

症例は72歳、男性。胸部単純X線写真にて異常陰影を指摘され、TBLBにて腺癌と診断した。画像所見にて右S1とS2に辺縁不整で周囲にスリガラス影を伴った含気型の腫瘍影を認め、S2の腫瘍は空洞を伴っていた。右上葉切除、S5部分切除、縦隔リンパ節郭清をし、病理組織学的所見は乳頭型腺癌であった。周囲に浸潤影を伴い多発に存在し、空洞を伴う肺癌は画像診断にて結核との鑑別が困難なことがあり注意を要すると思われた。

20. 免疫組織学的検討が有用であった異時性二重癌の1例

愛知県がんセンター呼吸器科
堀尾芳嗣, 樋田豊明, 鈴木勇史
吉田祐加子, 吉田公秀, 杉浦孝彦
同 遺伝子病理診断部 谷田部恭

症例は80歳、女性。既往歴に右乳癌手術。12年後の胸部レントゲンで右下葉の異常影を指摘され来院。CT下生検標本にTTF1とSPAに対する抗体

を用いた免疫組織染色を行い、肺腺癌と診断。右頸部リンパ節の吸引細胞診検査で腺癌細胞を検出し、リンパ節生検も施行。CT下生検標本と乳癌の標本との比較を行い、乳癌のリンパ節転移と診断した。確定診断に免疫組織学的検査が有用であった異時性二重癌の1例を報告した。

21. 下咽頭癌術後で診断に時間を要した肺扁平上皮癌の1例

三重大学第3内科
藤本 源, 田口 修, 油田尚総
畑地 治, ガバザ エステバン
足立幸彦

55歳男性。H3下咽頭癌にて根治術を受けていたがH9胸部X線で右上葉に異常陰影出現し当科受診。喀痰細胞診にてclass V、気管支鏡では右上葉より確定診断得られず、耳鼻科による再発の検索でも異常なかった。3ヶ月後のCTにて左S6に結節影出現、気管支鏡にて肺扁平上皮癌と診断された。occult cancerであり、咽頭癌の既往があったことより診断に時間を要した1例であった。

22. 再発した浸潤性胸腺腫に対する化学療法が奏効した1例

静岡市立静岡病院呼吸器外科
磯和理貴, 山田 徹, 青山晃博
陳 豊史, 千原幸司

64歳男性。2000年4月にIVa期胸腺腫に対して、切除術を施行した。同年11月右肺の腫瘍が出現し、胸腔鏡下肺部分切除術を行い、転移が確定した。2001年9月前縦隔に局所再発、両肺に多発転移が出現し、パクリタキセルとカルボプラチンによる化学療法を施行し、著明な縮小効果が得られた。

23. 化学療法が奏効した癌性リンパ管症合併肺腺癌の1例

公立陶生病院呼吸器・アレルギー内科
片岡健介, 谷口博之, 近藤康博
西山 理, 多賀 収, 清水淳市

56歳、女性。平成11年10月、長引く咳の精査の結果、肺腺癌cT3N2M1、stage IVと診断。HRCT、BALにて癌性リンパ管症と判明した。Carboplatin (AUC 6.0) + Docetaxel (60 mg/m²) による2剤併用化学療法が奏効し(PR)、